

続・『絵本でつくるワークショップ』

槇 英子

淑徳大学総合福祉学部教育福祉学科



1. 2つのワークショップに取り組む

保育者を養成するという仕事を始めて15年近くの月日が流れようとしています。それ以前から造形講師として保育者と共に子ども達に関わり、幼児の造形表現の重要性を実感してきただけに、たった一人の美術系教員として、何をすべきかを模索する日々でした。実習指導や小学校教員の養成などの幅広い業務にも携わるなかで、肝心の図画工作や造形表現の授業については未だに探究中という状況ですが、その間にゼミ活動による学生指導については様々な工夫を重ねてきました。本稿では、その一端をご紹介します。

大学の同僚との協働によって「絵本の世界を体感するワークショップ」の実践が始まってから、今年度で9年目になります。当初は大学祭のイベントとして複数のゼミが連携して開催するだけでしたが、現在では、ゼミ合宿で沖縄の保育園でも実践するようになり、「ワークショップの2本立て」のような形になっています。学生達は3年次の大学祭で後輩として体験し、春休みに沖縄で企画実践し、4年次の大学祭では中心的存在となって運営しています。

大学祭では、事前申し込みと当日参加の30~40名の子ども達と、学生とも子ども達同士もほぼ初対面という関係性の中で1冊の絵本の世界を体感するワークショップを行います。毎年、複数のゼミ生40名以上が図工室に集まり、絵本選びから始まり、運営方法や内容について話し合い、出版社との交渉や参加申し込みの手配などを分担します。その過程では、絵本を読み込み、何を体感することをねらいとするのかを考え、指導案を作成し、多様な教材研究(造形体験)を行い、工夫と改善を重ね、材料を収集し、年齢に応じた援助を考えるなど、失敗を重ねながらもまさに保育の専門性に関わる体験を行っています。中には自分達で絵本を作ってからワークショップを企画した年もあり、彼らの「すべては子ども達の笑顔のために」という姿勢にはいつも感心させられています。今では、教員の役割は経過報告を受け、造形面で素材やヒントを提供し、時折問いを立てて本質を見失わないようにすることくらいです。



中庭でワークショップで行う造形活動を体験する



片付けながらも遊ぶことを忘れない学生達



出会いの感動を体験できる巨大な熊を作る

ワークショップを始めてから4年目に、その取り組みを『絵本でつくるワークショップー体感しよう絵本の世界ー』¹⁾にまとめました。そこでは、なぜワークショップなのか、なぜ絵本なのかに関する解説と当日までの準備や当日の活動などの

取り組みの詳細を示しました。そこで示した学びの視点は図1の通りです。つまり、学内で授業だけを受けていても、それだけでは必要な専門性は十分に育たないと考え、社会や文化や自然との接面を広げることによって専門性を高めていこうとしたのが初期の取り組みでした。



『ぐりとぐらのえんそく』のワークショップの一場面(大巖寺)

沖縄での実践もこの3月で6回目となります。沖縄に向けての取り組みは、はるか遠く離れた、行ったことのない園の様子や子ども達の姿を想像し、先生方と連絡を取り合い、初めて会う子ども達とのワークショップを企画し実践するというものです。準備で作り込み過ぎて運搬できない、現地で思ったものが調達できないなど、様々なハプニングが必ず起こっていて、卒業後には楽しい思い出話になります。毎年、打ち合わせと指導案の指導までしてくださる先生方の気持ちに応えることができるのかという不安もありますが、春休みに自発的に大学に通って準備をする学生達の姿を見ていると、その過程で保育者としての構えのようなものを獲得し、同僚性の原型を養い、確実に専門性を磨いていると感じます。そして、当日の沖縄の子ども達の笑顔から「できれば来年も」という気持ちを双方で共有して終わることができています。

大学祭と沖縄、どちらも、保育行為の前提となることも理解や環境の把握、関係性の構築が難しい状況からスタートするというのが特徴的です。そのため、とにかく相談し合い、多面的に調査・検討せざるを得ない中で悶々としながら準備をすることになります。実はこの葛藤体験がとても重要なポイントになっていると感じています。そして集団の想像力を鍛え、いくら綿密に準備しても、結果的には想定外の事が起き、思いがけない面白さに出会います。それをどう捉えどう行動するのも大切なポイントです。ブリコラージュが自然発生し、その過程では、もめ事も発生します。「たいへんなゼミ」とも思われがちですが、これらを体験したゼミ生達は、やりきった達成感を後輩達に語り、共に取り組む新たな仲間を呼び込んでくれています。最近では引継ぎノートを作るなどして様々な知見が伝授されているようです。

すでに多くの大学でアクティブラーニングが取り入れられ、知識伝達型ではない学びのスタイルが一般化し、ワークショップもその一つと考えられるようになりました。ワークショップにも多様な形態があり、アート系も魅力的ですが、保育者養成を主眼に置く場合は、参加者の主体性を尊重する教育系ワークショップに取り組み、成果の持ち帰りや筋書き通りに事を運ぶことが目的でないことを共有し、協働するのが有効なのではないかというのがこれまで続けてきた感想です。

保育者の専門性を育てる視点

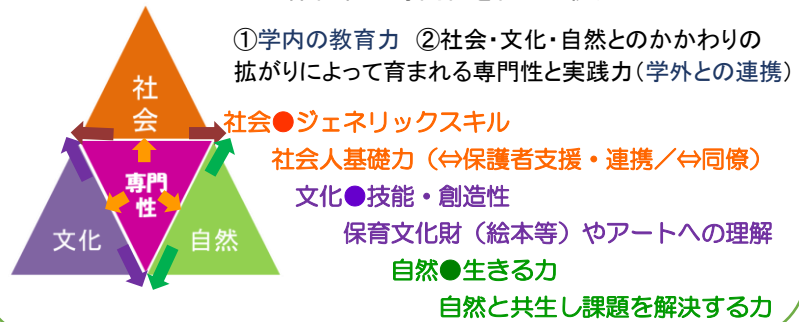


図1 ワークショップにおける学びの視点

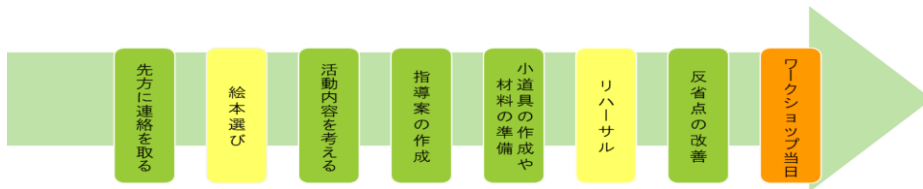
その有効性を客観的に評価することはできませんが、残された感想や現在も保育者として仕事を続けている様子から、その資質を養うのにプラスになったと考えています。ただし、1日だけのイベント型のワークショップでは、将来の職場での実践にいかすには、やや距離があったのも事実でした。そこで、同僚の発案により、実際の保育の場に参入し、実践するという形のワークショップを始めることにしました。それが沖縄という学生達にとって魅力的な場所であったことも、次の段階への移行をスムーズにしたと考えられます。



『おかえし』のワークショップの一場面(具志頭保育園)

2. 2つのワークショップを比較する

今年度の卒業研究では、2つのワークショップを比較し、自分達の将来の職場で実践する手がかりを得ようとする研究が行われ、興味深い結果が発表されました。まず、2つのワークショップのプロセスを図2のようにまとめています。(有川・田所・横田「絵本を体験するワークショップ～保育現場に生かすためには～」, 2019)。



沖縄:4つの園に分かれ、各園4人ずつで取り組んだ▲ ▼大学祭:全員で係を分担して取り組んだ 『ケーキちゃん』(のびる保育園)▲▼『おにぎりにんじゃ』

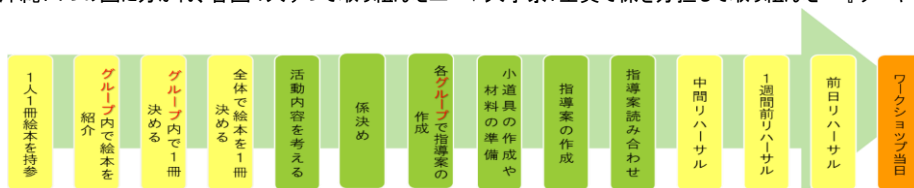


図2 沖縄ワークショップと大学祭ワークショップの取り組み過程の比較

また、学生達へのアンケートの結果、2つのワークショップで違いが見られた項目がいくつかありました。例えば、「それぞれのワークショップの前にどんな子どもの姿を思い描いたか」という質問に対し、3年次の春休みの沖縄合宿では不安な姿が書かれていたにもかかわらず、4年次の大学祭ではそれがありませんでした。それに対し「沖縄ならではの文化や気候の違いから子どもの姿も異なるのではないかと予想し不安が高かった学生達も、ワークショップを経験してきたからこそ子どもたちの楽しそうな姿が印象に残り、大学祭では楽しそうな子どもの姿を思い描いたのでは」と考察していました。もしかしたら、ゴールを定めず面白がることを学んだのかもしれない。また「ワークショップを通して、自分で成長できたところがあると思いますか」という問に対して、沖縄に関しては全員が、大学祭については8割が肯定し、どちらも「他者との連携」をあげた学生が最も多いという結果でした。また、沖縄では「造形力」や「絵本の知識」、大学祭では「責任感」と回答した人数の多さが際立っており、両ワークショップ共、学生自身の成長につながった一方、それぞれで生まれた保育者の専門性の質が異なることが推察されました。



ケーキを飾る▲ ▼悪者を倒しておにぎりポーズ



そして、この研究のまとめは、「こうした活動は、創造性や自ら考える力の成長の可能性を広げる事に繋がると思うので、保育現場で積極的に取り入れていきたい。」と結ばれていました。行動につながる学びこそが最も深い学びであると考えます。それは、多くの関わりから生まれた心に残る体験がもたらしたものであると感じました。

3. 「真剣な遊び」としてのゼミ活動

私のゼミ生はほぼ全員が保育者を目指していますので、日々子どもと共にいる人になるのに必要な学びは何なのか、それをいかにして身に付けるのかという問いと向かい合っています。それは教えられるものではなく学生自身が体験を通して「感じてわかる」ものなのではないかと考え、質の高い体験を願ってゼミ活動を行っています。それが遊びであることが大切なのではないかと思うようになりました。発想し、創作し、遊び、共有し、振り返り、新たに発想するという「創造的な学びのスパイラル」は幼児の遊びそのものと考えられています²⁾。学生時代の学びを豊かにし、学ぶことを面白くするのは、夢中になって試行錯誤する「真剣な遊び」の体験なのではないでしょうか。そして豊かな活動が展開する環境構成を行うことが、保育者養成を担う美術系教員の面白さなのではないかと思うようになりました。幼児教育と同様、環境と遊びをキーワードに、もうしばらく学生達と共に遊びつつ、子どもと共振できる感性をもった保育者を育てていきたいと思えます。

1) 槇・仲本・瀧・松山『絵本でつくるワークショップ』(萌文書林)2014

2) ミッシェル・レズニック『ロングライフキンダーガーデン』(日経BP社)2018